

陳 情 書

小樽運河問題調査考究会

住所 札幌市北区東西丁目、藤女子大学文学部内

代表氏名 小笠原 克

昭和五十三年九月二十五日

北海道議会

議長 佐々木 豊 殿

小樽運河問題調査考究会 代表委員

小笠原 克（藤女子大学教授・日本近代文学、札幌市）

九島勝太郎（北海道文化財保護委員、札幌市）

国松 登（画家、札幌市）

佐々木 遼郎（劇作家、札幌市）

更科源蔵（詩人・北海道文學館理事長、札幌市）

高野斗志美（旭川大学教授・文芸評論、旭川市）

田上 義也（北海道国際文化協会会長・建築家、札幌市）

林白言（北見文化連盟会長、北見市）

八木義徳（作家、東京都町田市）

山内栄治（北海道労働文化協会理事長、札幌市）

米坂三テノリ（釧路女子短期大学教授・彫刻家、釧路市）

## 陳情要旨

私たちちは、昭和四十一年に立案・着手された道道臨港線工事(再開に伴う)小樽運河の埋立に反対であり、運河を現型のまま保存し、抜本的な清潔化による再生を願っています。併せて、運河周辺の歴史的文化財的な石造建築群や、かつての銀行・大商店街が醸し出す見事な街並の修復によって、日本全土に向けて誇りある港湾都市小樽独自の景観の保全を求めています。就そましては貴議会において御審議のうえ、関係各方面へ、恵み百々御配慮あらんことを切望いたします。

右、陳情します。

### 陳情理由

私たちは、昭和五十三年六月に標記の会を結成し、「小樽運河と石造建築群周辺の歴史的・文化財的街並の保存と再生を求めるアッピール」(別紙添付書類)を発表してから、応分の活動を続けてきました。右のアッピールと同趣旨の「要請書」は、同時に、小樽市長・小樽市議会議長・小樽市教育委員会委員長に手交さります。また、右のアッピールを全国の学問・芸術・文化関係者に届けた結果、八十名の署名賛同者を得、发起人と合わせ百二十余名(九月二十九日現在)の声を集めました(別紙添付書類同)。

日本建築学会の明治建築調査小委員会主査・村松貞次郎氏(東大教授)は、神戸長崎の優れた街並とともに、八小樽運河との周辺の歴史的建築物群は、日本の近代史を象徴する三大景観の一つである」と高く評価しています。

すでに、文化省の予備調査(昭和四八年六月二十八日)は、運河周辺の石造建築群の価値を高く評価し、翌四九年五月の文化省の文化財保護建造物課長(伊藤延男氏)談話は、臨港線着工のため破壊された有幌地(有幌)仓库群の喪失を遺憾としてあります。また、御座知りとおりと存じますが、五十一年二月に「小樽運河を守る会」が貴議会に提出した「陳情書」は、同年三月十一日の本会議で全会一致で採択されています。加えて今夏、私たちのアッピール後に、小樽市の福北地区住民団体は、「臨港線は商圏

今断たとして小樽市・同市議会にルート変更の陳情書を手渡すことがあり七月八日、同時期には一方で著者在ちによる「ポート・フェスティバル」(七月十九日)が運河周辺を会場に数万人の人出を呼び、いわば「観光価値」という新らしい觀の可能性を強く印象づけました。主な新聞社の動きを見ても、北海道新聞は社説で(七月十六日)、「小樽運河」の保存を考えよ」と論じ、「毎日新聞」は「うんてん」で、小樽運河を再興の水路にと呼びかけ、朝日新聞社は「都市開発と歴史的環境の調和を考える―小樽運河問題」によせて「」という講演会を小樽で開き(八月二十八日)。講師は元通産省次官・佐橋滋氏、東京国立文化研究所長・伊藤延男氏、東大教授・稻垣榮三氏)、北海道新聞社も「あすの小樽を考える」シンポジウム(九月十二日)。小樽市長・志村和雄氏、市土木部長・西尾章市氏、郵便海陸運輸社長・山本博原氏、道議会議員・砂原清治氏、竹山寛綜合建築研究室長・竹山寛氏)を開催するなど、小樽運河存廢問題は多様な論議を生んであります。<sup>7)</sup> 朝日新聞・全国版・文化欄の佐橋滋氏論文<sup>8)</sup> が歴史的投資もすめ(九月四日)や、同紙同欄の瀬戸内寂聴(晴美)氏のエッセイ「運河の運命」(九月九日)にも、日本全土の関心が注がれました。

道内他都市にも問題意識は波及し、九月十一日には旭川市教育委員会の一形が、旭川の文化遺産見直しの参考にと小樽を訪れます。

しかし、ついで現状は、「読売新聞」(道内版・九月四日)、月曜レポート、補特集の見出しを借りるならば、「小樽運河戦争」は「大詰めの攻防白熱」であって、来春の「市議選で住民にケタ」といった搭配でもありますようか。けれども、私たちは、小樽運河の存廢は、いつどの政争に左右される次元の問題ではなく、また、一地方都市の交通問題にとどまる問題でもないと考えます。

小樽運河とその周囲の現状は、北海道産業史の象徴的な生成を物語るかけがえのない現場であり、かつ、小林多喜二や伊藤整の文学を眼と足で確かめることのできる、また過去現在未來にわたる画家の情感を搖さかる、文字通りに「文化」の創造の現場であります。そしてまた小樽を訪れた幾千万人の思い出の核となり、小樽を故郷とする人々の心の振り所となっています。

小樽市民にとっても、この開放された水辺の核からは、運河の洋化を実現

すれば、他都市に例を見ない穏やかな空間となり、ここを勞働の場として来て心をすこませた先人たちの喜怒哀樂に思いを寄せながら、後代への誇るべき遺産として保持し続けて行くでしょう。

小樽市の道路事情の悪化を私たちは承知していますが、一方で各方面から道路の提案が示されることはあります。現在、いかに高くつこうとも、他にかけがえのない運河をつぶして道路にする安易は、歴史的な愚癡にはなりません。しかも運河とその周囲の風物景観は、たどりにある無用の長物ではなくて必ず修復再生できる文化財的存在です。

石狩湾新港の完成を待つまでもなく、戦後の小樽港は滿艦飾の出船入船で賑わった昔日の活況を失つて久しく、運河をつぶして臨港線道路が実現したとて船が入つてゆわけもない。むしろ、律儀で古風な現在の港湾を新らしい基地と転換する行政の眼こそが待望されます。

昭和四十八年以来の「小樽運河を守る会」の在り方は、まさに貧困で生活感のあふれる市民運動となっています。私たちの会のみならず、九月中旬、東京でも「小樽運河を愛する会」が誕生し、日本全土の政・財界とはもとより、学界・文化界、そして生活に根ざした文化を享受したいと願うすべての人々の眼が小樽に注がれています。

このようす、小樽のみならず本道各地から、そして日本全土からその帰趨を注目されている。小樽運河問題について、北海道議会が手を携いて傍聴することは、もはや許されないと存じます。

私たちは、名古屋を即覧に駆ればあわかつて、いわゆる一党一派に偏りるものではなく、一地域の利害に執するものでもあります。ただ一点、「小樽運河問題」は、日本近代の文化とその保存再生——すなわち現代の日本人への責任の問題として考えているのです。  
どうか、私たちは意を十分に汲みとられ、現在非ならず過去から未来にわたる歴史の眼を中心として、保存再生への活路を切り拓いていただきたく衷心より要望する次第であります。

## 小樽運河と石造建築群周辺の

歴史的・文化財的街並の保存と再生を求めるアツビール

私たちが、それそれを住む地域には、たとえ文化財と名がつかず、ことごとしく文化遺産と呼ばれなくても、住む人々の心の安らぎとなる歴史や風物があつて、それが「あるさと」を具体的に感受させるのだと思います。

北海道小樽市の、港湾に直結する千二百メートルの運河、その周辺に建築された石造倉庫の群立は、十七世紀前半に「北海のウオモリ街」と当地とも稱した銀行・大商店街とも繋り合ひ、海に迫る山麓めざして這い進み盛りあがる街全体の景観とも切り離せない見事な風格をたたえ、今も静かに息づいています。

日本建築学会の「明治建築調査小委員会」の査定をされた東大教授村松貞次郎氏は、神戸の異人館の並ぶ山本通り一帯、長崎のグラバー邸のある南山手地区とともに、小樽運河とその周辺の歴史的建築物群は、日本の近代史を象徴する三大景観の一つであると高く評価されました。神戸・長崎はすでに保存・修復を進めていますが、小樽は逆に「道道助港線」計画ですでに有観地区の食庫群は取り壊され、景観の中心となる運河を埋め立てようとかされているを見聞すると、私たちも黙っておれない思いに駆られます。

身の小林多喜二や伊藤紫の文学に欠かせぬ母胎とも背景ともなりました。また優れた画家の琴線に触れて幾多の名画を生み、映画・テレビの名高いロケ地ともなっています。時流の赴くところ、産業界の最前線から後退したとはいえ、この一世紀の間、小樽を訪れた幾千万の心に忘れがたい印象をとどめ、小樽を故郷とする人々の魂の奥に宿しておつても来ませー。

その歴史的文化的意味は高く深く、建築史的・文化財的意義は、日本建築学会・文化財保護委員会の強調するところであります。すでに北海道議会文教林務委員会は溝場一致で「小樽運河を守る会」の陳情と文化遺産としての保存調査・文化庁の調査要請・道路路線変更の再審議一を採決承認し（昭五〇・三）、北海道教育委員会も小樽市教委に同趣旨の通達を出しています（昭五〇・九）が、小樽市の対応は鈍く、陽

新潟の報道によれば、六月十五日に小樽市側と「守る会」との会合が開かれ、△「運河の文化財としての価値判断は抜いて地めりて道路化を進める」という市の態度に、守る会が激しく反発、話し合いは平行線に終つた△（北海道新聞・小樽版）そうです。この何が何でも道路として埋め直すとする市側の態度に、私たちは賛りと失望を抱かざるを得ません。

半世紀の少ない小樽都心の、僅かに開放された水辺の擴がりは、その汚濁の淨化が果されるなら文字通りに市民生活の潤いの場・憩いの空間となりましょう。

小倅選詞問題一卷

事務局担当 札幌市北区北十六条西二丁目 藤女子大学内

小笠原虎

登  
（画家・札幌市）

二 形刻家・札幌市

雄  
（北大名譽教授、工学、札幌中）  
一  
（北大教授、南生一学）

**志美**（旭川大教授・文芸評論家・旭川中  
學校教員・民藝藝術家・旭川市）

ノリ（鉄路女子専大教授・彫刻家・鉄路

三郎（脚踏車圖書館長・新宿市）  
(劇作家・札幌市)

舊  
（北見文化連盟会長・北見市）

北海道教育人教授・教育学・札幌

博（詩人，北海道詩人協會會長，札幌

三  
作家·重慶市文化財專門委員·

口香  
（画家・札幌市）  
藏  
（コンチネンタル貿易社長・札幌市）

子治克（文芸評論家・札幌市）

小樽運河問題」を考究の会アッパー署名者

(昭和五十三年九月二十日到着分まで、到着順)

- 小松伸六（文芸評論家、東京） 木野工（作家、東京都）  
瀬沼茂樹（「」） 永谷保彦（北海道共同画新社、札幌市）  
時雨音羽（詩人、「」） 瓢正雄（北大教授、「」）  
田中彰（北大教授、日本近史、札幌） 川上信夫（「」）  
池田善長（北海道大教授、経済学、「」） 荒巻孚（東洋大教授、東京都）  
小川原脩（画家、俱知安町） 伊与部隼男（「」）  
吉田精一（北海道大教授、日本文學、東京） 小田切進（日本近代美術館理事長、東京都）  
手塚英孝（文芸評論家、東京） 瀬戸幸三（帯広農業大教授、帯広市）  
鶴田知也（作家、東京） 西野辰吉（作家、東京都）  
武隈良一（元小樽商大教授、藤沢市） あおは比呂司（漫画家、東京都）  
熊谷和夫（北海道國大教授、札幌市） 遠藤明久（道工大教授、建築学、札幌市）  
小田切正（北海道教育大教授、「」） 笠原伸夫（日大助教授、東京都）  
本間徹夫（北海道高教国際教育研究会事務長、「」） 井上司（道歴研修、札幌市）  
坂本亮（教育評論家、「」） 鈴木秀一（北大教授、「」）  
内根弘（詩人、東京都） 唯是震一（作曲家、東京都）  
国分一太郎（教育学者、「」） 大高ひさき（作詞家、「」）  
風山瑕生（詩人、「」） 針生一郎（知光大教授、日本A&B作家会議、「」）  
大谷久子（画家、「」） 小竹義夫（画家、東京都）  
佐藤喜一（文芸評論家、旭川市） 佐々木孝丸（俳優、「」）  
三好宏一（北海道教育大教授、札幌市） 小島真佐吉（画家、「」）  
森山重治郎（専修大美濃短大教授、美濃市） 霜田正次（作家、「」）  
鈴木喜三夫（演説家、札幌市） ふじかある（千葉市）  
市川房枝（参議院議員、東京都） 田中針水（画家、東京都）  
竹田正直（札幌市） 山田清三郎（作家、「」）  
渡辺哉（詩人、「」） 宮原博平（北大教授、東京都）

- 小田切秀雄（文芸評論家、東京都） いいたもも（作家、東京都）
- 久保田正文（） 羽仁五郎（評論家、横綱貿易）
- 扇畠忠雄（歌人、方葉学者、仙台市） 杉浦明平（作家、奈良県御所市）
- 石堂清倫（現代史家、東京都） 佐山峻（HBC制作部長、横浜市）
- 雨喜本宏（日刊報知記者、江別市） 棟徹夫（境工大教授、境川市）
- 郡司正勝（早稲田教授、東京都） 五十嵐広三（前旭川市長、旭川市）
- 栗谷川健一（グラフィックデザイナー、札幌市） 小桧山博（作家、札幌市）
- 小谷博貞（画家、札幌市） 守分寿男（HBC制作部副部長札幌市）
- 中西悟堂（日本野鳥会会長、横浜市） 横路孝弘（象徴院講員、札幌市）
- 古川善盛（詩人、旧小樽市民、札幌市） 濑戸内晴美（作家、京都府）
- 星野芳郎（科学史家、京都市）
- 松永伍一（詩人、東京都）
- 山部芳秀（國民文化會議、東京都）
- 荻原昌弘（映画評論家、）
- 玉川雄介（児童文学者、札幌市）
- 野田宇太郎（文學史家、東京都）
- 島本虎三（象徴院講員、）
- 星尾晴雄（北海道教育評論社、札幌市）
- 色川大吉（東洋経済大教授、東京都）
- 三宅嘉子（道清学者、仙台市）
- 船山謙次（道教育大名譽教授、札幌市）
- 太田青丘（歌人、湘音社代表、鎌倉市）
- 金子兜太（俳人、埼玉県熊谷市）
- 竹内乙吉（詩人、大都市）
- 夏堀正元（作家、岩手県盛岡市）
- 増山元三郎（東京理科大教授、東京都）